



亡国の雌豚姫

輪姦凌辱完堕ちCG集

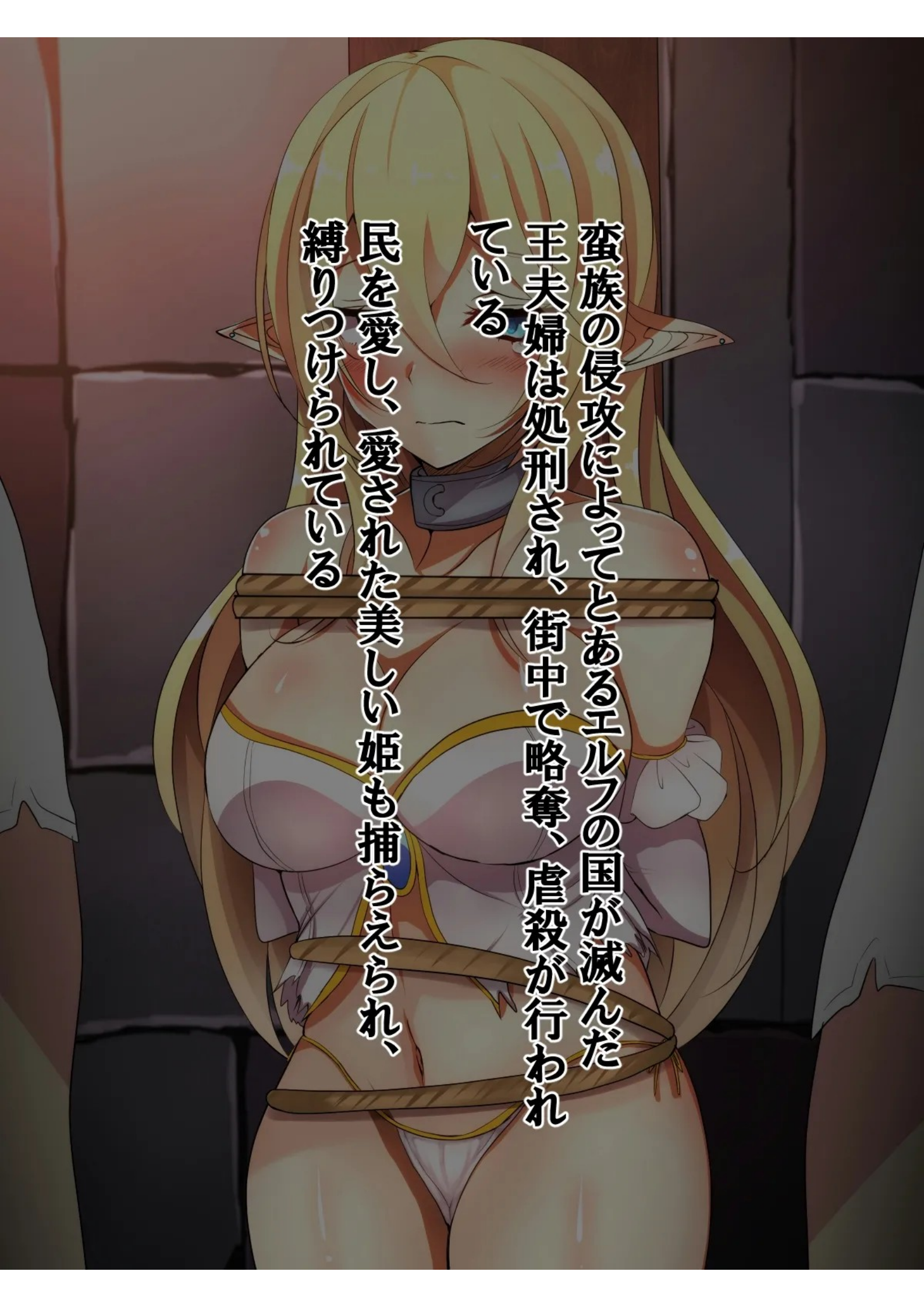
お買い上げ
頂きありがと
うございます

在り日



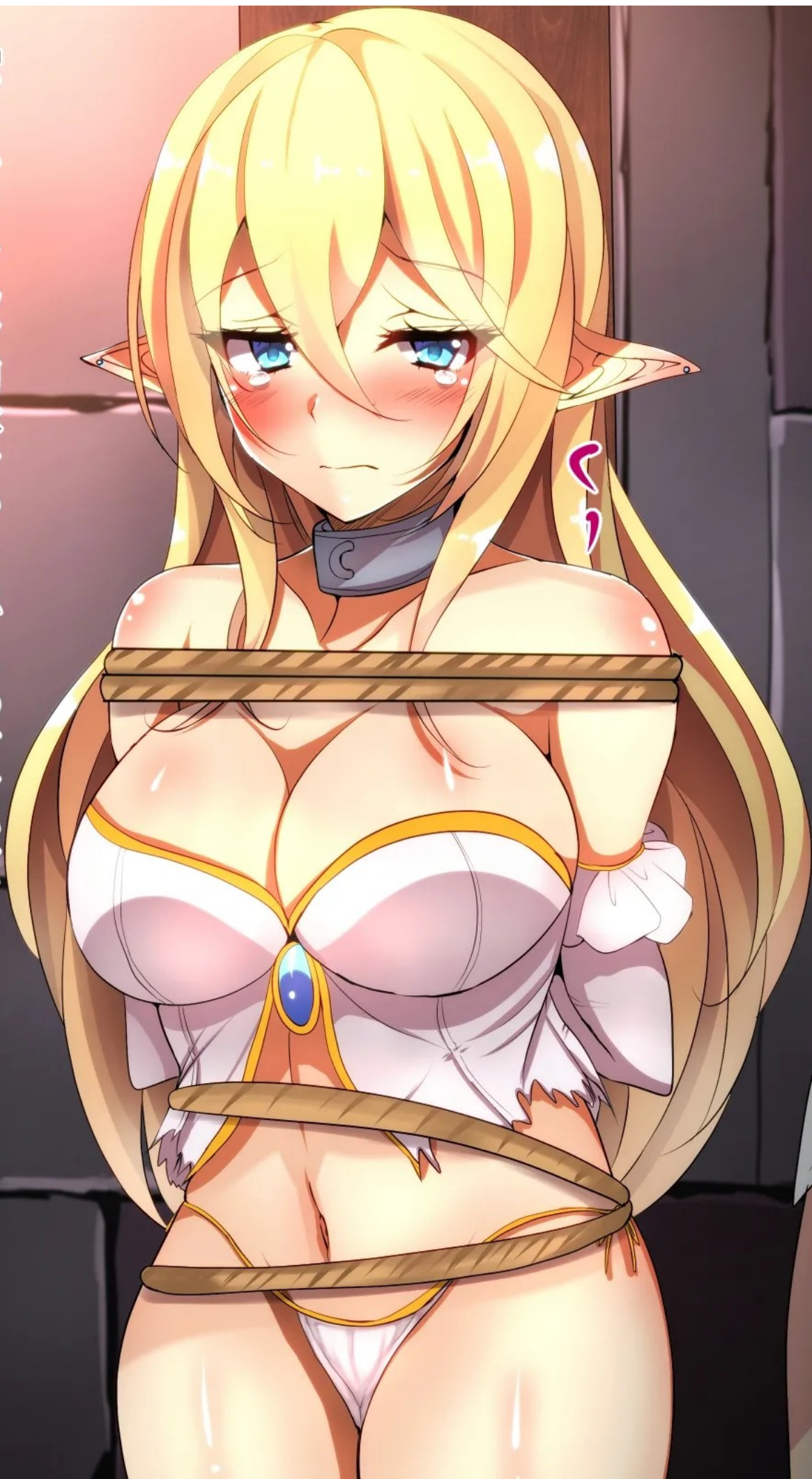
姫様

…今日もお美しい♡



蛮族の侵攻によってとあるエルフの国が滅んだ
王夫婦は処刑され、街中で略奪、虐殺が行われ
ている
民を愛し、愛された美しい姫も捕らえられ、
縛りつけられている

「私もこのまま殺されるのですね…」



「オイオイそんな勿体ないことするわけないだろ
ジジイやババアは相手してもしようがないから殺したんだ
お前はその体で楽しませてくれよ♪」

「どこまで愚弄するつもりですか
私はあなた方みたいな相手に屈したりはしません
早く殺しなさい!」

「そう焦るなって

終わるころにはもうセックスのことしか考えられなくなって
死ぬこととかどうでもよくなるからなよ」



「ハハ」

「そうだな気持ちよくなってブツ飛んじまえば全部どうでもよくなるさ」

「おうおう」

「殺せとか悲しいこと言わなくなるまでタツプリ気持ちよくしてやるよ」



「…汚らわしい」

「いつまでそんな強気でいられるかなあ」

ギン
ギン
ギン
ギン



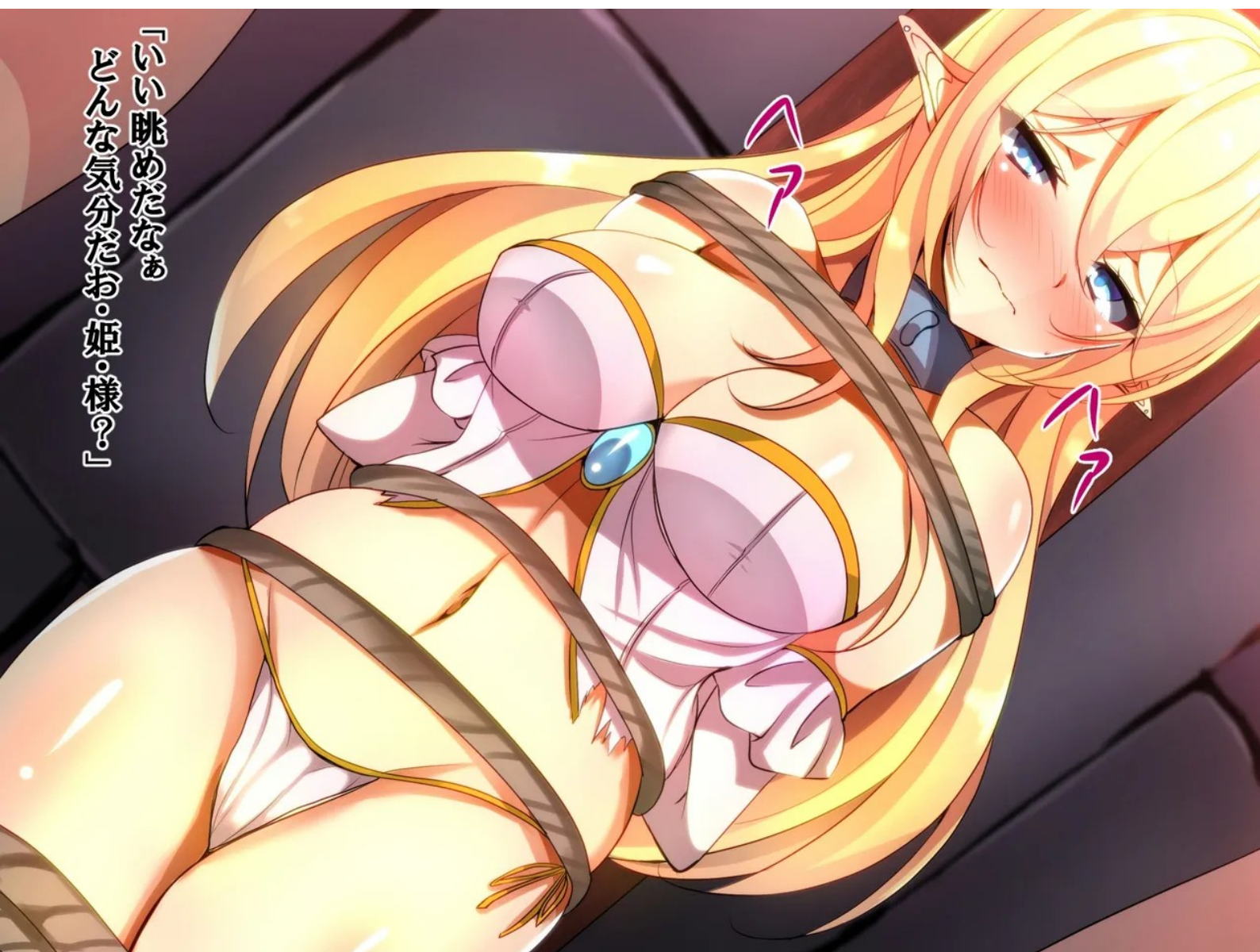
「ハァハァ…」

早くやっちまおうぜ！
もう待ちきれねえよ！」

「ハァハ
そう焦るなって」



「いい眺めだなあ
どんな気分だお・姫・様？」





「…さ、最悪に決まってるでしょ」

「そっか気分悪いんだなそれなら
服を脱がせて診察しないとなあ」



「おちっ…
直に見るとスゲーなあ
こりゃ国民に人気もあるわけだ」

「下の方もピッタリしてるなあ
初物なんじゃないか」





「全員相手し終えるまで
正気を保ってられるかなお姫様♪」

「あーもう我慢出来ねえ！
ぶち込んでやる！」

ゲラ

ゲラ

「...」

「いい目つきしてるなあ
いつまでそれが続くかなあ」



「はぁ...はぁ...」

「強気でいても体は震えちまってるよ
堕ちてく様を見るのが楽しみだなあ」



「あっ…ひっ…」

「ぐぐおっ食いちぎられそうなくらい締め付けやがる！」

「おーおー血い出てるよ
やっぱり初物だったなあお姫様♪」



ズン
ズン

「どうだこんな下劣な奴に純潔を奪われた気分は？」

「ひい…ひい…はっ…はっ…」

「ハッ痛くて声も出ないか」



「オラッ出すぞ！
下劣な子種で孕めっ！」

「……んっ……」



「あー気持ちよかった
王族マンコサイコー！」

「よし、どんどん輪姦してやれ！」





「ホラホラ後がつかえてるんだ！
使える穴は全部使ってやるぞ」
「も、もうヤダー！やめて！」

ぐっ

ヤダ

ヤダ

ぐっ



「ん、んぐう…」

「オラッもっとしっかり
吸い付け！」

「んう…」

「ケツの穴もしっかり締める」

んっ…

ずっ

ずっ



「いっほっ！」

「オラオラどうだ気持ちいか？」

「ゲボッ！ゲボッ！」

ずっ

おっ

おっ

ぶっ
りっ

ずっ





「あー出た出た」

「オラッ吐くんじゃねえよ飲み込め！」

「ううっ...」

ドゥク

ドゥ

ゲホッ

ゲホッ

「も、もういい加減にしてっ!」

「何言ってるんだまだまだこれからだぞ
全員相手にするまで終わらないからな」







「あっ♡あっ♡」

「もう感じまくってるじゃねえか
いくら聖潔ぶっても本性は隠せない
なあ」
「ぞ、そんなこと…」

あっ

あっ

ず

ず

っ

「キュウキュウ締め付けやがて…
オラッ出すぞ、このまま中に出すぞ！」
「だ、だめえ…」







「ハハッ
気持ちよくイっちゃったよこのお姫様」
「うう…イってなんか…」
「余計な話してる暇はないぞ
どんどん輪姦してやれ！」

「はぁ…はぁ…これだけヤラれても
完全には屈しないと驚いたな」

「…当然了…」



「俺たちは満足するまで出したしこれからどうするかな
殺すのは勿体ないし完全に屈服させてえなあ」

「よし、俺にいい考えがある」

処刑前の捕虜たちに最後にいい思いさせてやろうぜ」



「おい、お前ら死ぬ前に姫様とやりたい奴いないか？
冥途の土産に二発ヤラせてやるぞ！」

「ほ、ほんとうにいいのか…？」
「どうせ殺されるんだ！最後に好き勝手してやる！」



「ハハッ愛されてるなあ姫様参加者たくさんだぞ」

「俺たちの攻めには耐えられても、自分とこの民衆に
犯されるのは耐えられるかなあ」



その後、延々と自分を犯した男が首を刎ねられるのを
見せられ続けた姫の心は完全に壊れた



数か月後



「き、今日もこんな卑しい雌豚を犯す
ために集まって頂きありがとうございます♡」
「ハッ、すっかり堕ちちまったなあ」

「今日は昔馴染みもギャラリィに来てるからな
しっかりと元気な姿を見せてやれよ」



「は、はい♡
みなさん今の私の姿をたくさん見てくださいね♡」



「も、もう待ちきれねえ！早くぶち込みてえ！」
「よおし、しっかり奉仕してくれよお・姫・様♪」
「はい♡」





「うふふ…おっきいおちんちん♡
凄くおいしそう♡」

「早くおまんこに
挿入したいわ♡」



「う、うおっすっげえ吸い付いてくる…」

「こ、これはヤバイ……すぐに出ちまいそうだ」



(んっ♡チンカスおいしい♡)

「ぐぐおっ…もう無理！出るっ！」





「はぁ…はぁ…精液おいしい♡」

「でもごっちの口だけじゃ物足りないの♡
下も精液でいっぱいにして♡」



パン

ド
♡
オ

ド
♡



「早く…早くう…」
「ハッ欲しがりだなあ
元の家臣たちの前で恥ずかしくもないのか？」
「そんなことどうでもいいの♡
早く挿入れてほしいの♡」

くちゅ
くちゅ

く
ちゅ



「あっ♡ふふっ、もっと激しく動いて♡」





「うっ…はぁ…すっげえ締まる…
あっという間に搾り取られそう…」
「出して♡中にいっぱい出して♡
溢れる位大量に種付けして♡」





「あー出した出した、もう出ねえよ」

「俺はもういいわ、まだやりたい奴いるか？」
「もうみんな金玉スッカラカンだろ」



「はぁ…はぁ…」

ふふふ精液でお腹いっぱい♡」

『これだけの人数搾り取るとはな
まったくとんでもない雌豚姫だよ』



「元の身内の前でこんな姿晒して今どんな気分だ？」

「もうそんなことどうでもいいの♡
今気持ちよければそれでいいの♡」



「……いつらはこれから処刑されるが何か
言っておきたいことはあるか？」

「ふふふ…みんな今までありがとうね♡
私、もう気持ちよくなることしか考えられないの♡」











































































































